

No. 17

博物館報



齋藤茂吉（1882～1953・明治15～昭和28）は山形県の金瓶に生まれ、東京帝国大学医科大学を卒業後精神病学を専攻し東大医学部の助手、長崎医学専門学校教授、のちドイツに留学し、養父の経営する青山脳病院をついだ。一方歌人として、アララギが創刊されると同人として活躍し近代短歌の新風を樹立した。歌論、万葉集研究、柿本人麿研究、随筆など各分野にわたって独自の業績を残し、昭和26年文化勲章を授与された。

茂吉が佐賀県の古湯を訪れたのは、彼が38才の時で、大正9年流行性感冒（当時スペイン風邪と呼ばれた）にかかりその転地療養のためであった。「あらたま編輯手記」によると、9月11日朝、唐津を去って夕暮にこの古湯温泉の扇屋旅館に宿している。ここでの静養で、これまでの血痰も徐々にとれ、健康も回復しそのうえ懸案の第2歌集「あらたま」の編輯も9月30日にはおえたので、「10月3日、すべてに感謝したき心持で古湯を立」って長崎に帰っている。この間3週間の滞在で、その作歌は第3歌集「つゆじも」の中に古湯温泉と題して38首が収録されている。

この歌碑は、昭和37年9月、佐賀県知事池田直氏をはじめ地元の有志によって、茂吉の宿、扇屋と隣合せの鶴霊泉の裏庭桜林の中に建てられた。同年10月3日、



茂吉がこの地を去った丁度42年目にあたるこの日、輝子夫人の手で、碑の除幕が行なわれた。この碑は、茂吉の歌史の一頁を飾る記念塔として貴重な資料の1つである。

なお茂吉が静養にあたった部屋は8畳と4畳の2間に回廊がある別棟で、現在も「茂吉療養之間」（上村点魚書）として活用されている。ここからは川上川の峡谷が面前にせまり、茂吉が満喫したせせらぎが快く部屋一杯にあふれている。

当館では、今年12月1日から開催予定の「日本近代文学展」に茂吉の原稿をはじめ遺品等も出品予定である。

目次

齋藤茂吉の文学碑	1
「日本近代文学展」紹介	2・3
佐賀県の野鳥目録（3）	4・5
第11回研究講座	6
茶室清恵庵紹介	7
博物館日誌・行事お知らせ	8

特別企画展紹介

日本近代文学展

名称 日本近代文学展

主旨 日本の近代文学は、明治以来ほぼ1世紀を経て、いまや貴重な近代日本の文化遺産として、わたしたちの精神の糧となっている。

今回、漱石、鴉外をはじめ、日本近代文学史上のすぐれた文学者の著書、原稿、遺品等を一堂に展覧し、あらためて近代文学とはなにか、近代を生きた日本人とはなにかを理解し、同時に現代の日本人としていかに生きるべきかを学ぶ機会とするとともに、広く一般の親賞に供する。

また、とくに本県の将来をになう青少年に対し、豊かな精神形成のための指針を提供しようとするものである。

主催 佐賀県教育委員会

佐賀県立図書館
佐賀県立博物館

後援 佐賀大学、東京都近代文学博物館

協賛 講談社、筑摩書房、図書月販

場所 佐賀県立博物館

期間 昭和48年12月1日から

12月23日まで

- 展示内容
- 1) 著書(単行本、個人全集、雑誌他)
 - 2) 原稿、創作ノート、日記
 - 3) 遺墨(書簡、書跡、色紙、短冊他)
 - 4) 遺品(万年筆、ペン、筆、硯、時計、パイプ、収集品他)
 - 5) 肖像(写真、自画像他)

記念講演会

日時 12月8日(土)13:30~16:00

講師 梅光女学院大学長 佐藤泰正氏

演題 「漱石と現代」

講師 作家 劉 寒吉氏

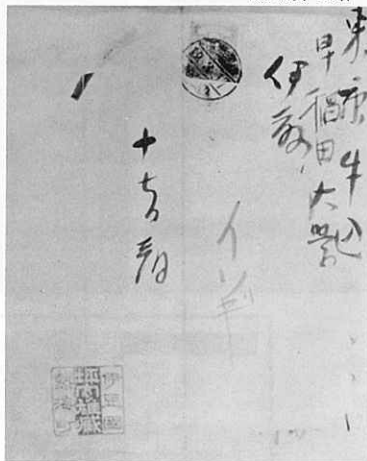
演題 「森鴉外と九州」

図録の発行 展示資料に関する図録を発行する。

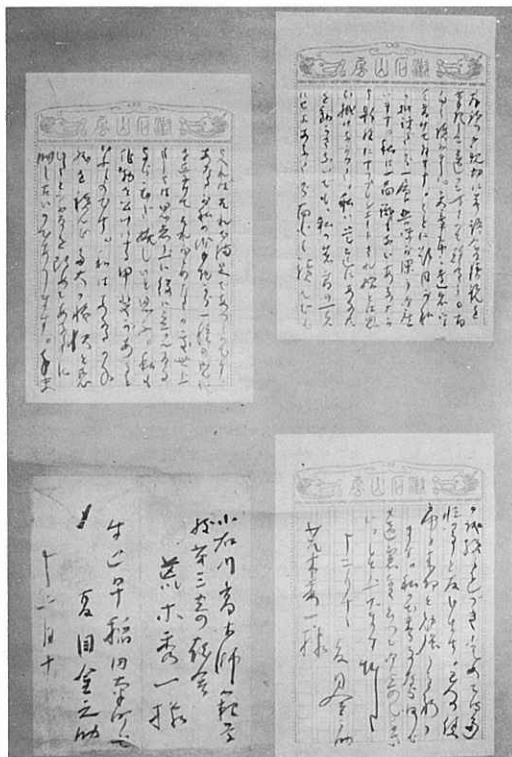
主な出品作家名

假名垣魯文	中村正直
福沢諭吉	坪内逍遙
二葉亭四迷	尾崎紅葉
幸田露伴	樋口一葉
国木田独步	徳富蘆花
広津柳浪	島崎藤村
田山花袋	森鴉外

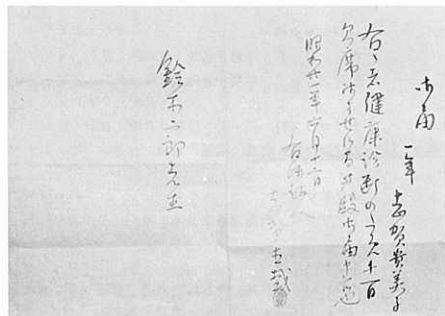
夏目漱石	石郎	寺田寅彦	彦風彦
阿部敦	郎	井利	実篤
谷崎潤一	郎	武者小路	之介
志賀直哉	郎	芥川竜之	直一
有島武彦	二	徳永光利	雄
宇野浩二	成	堀辰雄	平
小川端康成	雄	火野葦平	宏
尾崎一雄	治	野間由起夫	治
太宰治	房	安部公房	治
大江健三郎	子	林芙美子	治
林芙美子	治	坪田譲治	治
北原白秋	郎	萩原朔太郎	治
中原中也	治	中野実	治
宮沢賢治	治	与謝野晶子	治
与謝野晶子	治	若山牧水	治
長塚節	治	斎藤茂吉	治
河東碧梧桐	治	種田山頭火	治
加藤秋邨	治	吉田絳二郎	治
宮地嘉六	治		



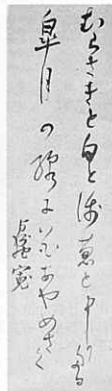
坪内逍遙書簡



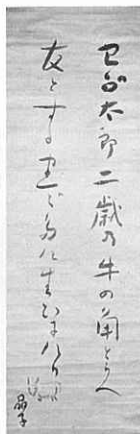
夏目漱石書簡



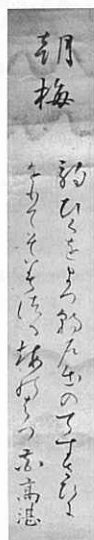
志賀直哉欠席届



与謝野鉄幹歌幅



与謝野品子歌幅



森鷗外短冊



河東碧梧桐句幅

佐賀県の野鳥目録 (3)



写真説明

ハシブトガラス 体、クチバシがハシボソガラスよりも大きく、声も比較的澄んだカアカアときこえる。繁殖期以外は群生する。雑食性で雑穀類、草木の実、ミミズ、ヘビ、ネズミもたべる。

フクロウ科

- +トラフズク、旅鳥、基山
- +コノハズク、夏鳥、基山、脊振山
- オオコノハズク、留鳥？、冬鳥、山地
- アオバズク、夏鳥、各地
- フクロウ、留鳥、各地

ヨタカ科

- ヨタカ、夏鳥、山地

アマツバメ科

- △ハリオアマツバメ、旅鳥、多良岳、七山山地
- アマツバメ、旅鳥、各地

カワセミ科

- ヤマセミ、留鳥、北山ダム、山地の溪流
- +ヤマショウビン、旅鳥、S. 42.5.9北波多 S. 43.5.3馬渡島
- △アカショウビン、旅鳥、各地の水辺
- カワセミ、留鳥、各地の水辺

ブッポウソウ科

- △ブッポウソウ、夏鳥、山地

キツツキ科

- △アリスイ、冬鳥、馬渡島、唐津
- アオゲラ、留鳥、浮岳、多良岳

- +オオアケゲラ、夏鳥、脊振山、多良岳
- コゲラ、留鳥、各地、山地

ヒバリ科

- ヒバリ、留鳥、各地

ツバメ科

- ショウドウツバメ、旅鳥、干拓地
- ツバメ、夏鳥、一部越冬、各地
- △コシアカツバメ、夏鳥、S. 45. 七山 S. 47. 玉島
- イワツバメ 夏鳥、基山、馬渡島

セキレイ科

- +イワミセキレイ、旅鳥、夏鳥、馬渡島、虹の松原
- +ツメナガセキレイ、旅鳥、S. 42.11.3三田川
- キセキレイ、留鳥、漂鳥、各地水辺
- ハクセキレイ、冬鳥、各地水辺
- (ホオジロハクセキレイ) 旅鳥、S. 41.9.27佐賀
- セグロセキレイ、冬鳥、佐賀平野、水辺
- ビンズイ、冬鳥、各地、松原
- ムネアカタヒバリ、冬鳥、干拓地
- タヒバリ、冬鳥、平野部耕地

サンショウクイ科

- サンショウクイ、旅鳥、各地

ヒヨドリ科

- ヒヨドリ、留鳥、漂鳥、冬鳥

モズ科

- +チゴモズ、旅鳥、S. 42.5.27馬渡島
- モズ、留鳥、冬鳥、漂鳥、各地
- △アカモズ、旅鳥、S. 43.5.17馬渡島 S. 46.8.20虹の松原

レンジャク科

- キレンジャク、冬鳥、各地
- ヒレンジャク、冬鳥、各地

カワガラス科

- カワガラス、留鳥、溪流

ミソサザイ科

- ミソサザイ、冬鳥、各地

イワヒバリ科

- +イワヒバリ、旅鳥、伊万里

ヒタキ科

コマドリ、旅鳥、脊振、九千部

△ノゾマ、旅鳥、有明干拓、塩田、脊振山地

コルリ、夏鳥、九千部、脊振

ルリビタキ、冬鳥、山地、各地

ジョウビタキ、冬鳥、各地

ノビタキ、旅鳥、各地

イソヒヨドリ、留鳥、北部海岸、島

マミジロ、旅鳥、S, 43.5.2馬渡島、S, 45.4.22神埼

トラツグミ、冬鳥、山地

クロツグミ、旅鳥、基山

アカハラ、冬鳥、各地

シロハラ、冬鳥、各地

マミチヤジナイ、旅鳥、S, 43.5.19馬渡島、多良岳

ツグミ、冬鳥、各地

ヤアサメ、夏鳥、山地

ウグイス、留鳥、漂鳥、冬鳥、各地

エゾセンニュウ、旅鳥、有明沿岸

シマセンニュウ、旅鳥、有明沿岸

コヨシキリ、旅鳥、各地

オオヨシキリ、夏鳥、各地

メボソムシクイ、旅鳥、馬渡島、高地

(コムシクイ)、旅鳥、基山

△エゾムシクイ、旅鳥、馬渡島

センダウムシクイ、旅鳥、各地

キタイタダキ、冬鳥、各地

セッカ、留鳥、各地

キビタキ、夏鳥、天山、多良岳、九千部

(マミジロキビタキ)、旅鳥、基山

ムギマキ、旅鳥、馬渡島、基山

オオルリ、夏鳥、天山、多良岳、九千部

△サメビタキ、旅鳥、馬渡島、多良岳

エゾビタキ、旅鳥、馬渡島

コサメビタキ、夏鳥、虹の松原、各地

△サンコウチョウ、夏鳥、九千部

シジュウカラ科

ヒガラ、旅鳥、馬渡島、山地

ヤマガラ、留鳥、各地山地

シジュウカラ、留鳥、各地

エナガ、留鳥、漂鳥、各地

+ ツリスガラ、旅鳥、筑後川口

メジロ科

メジロ、留鳥、漂鳥、冬鳥、各地

ホオジロ科

ホオジロ、留鳥、各地

ホオアカ、留鳥?、冬鳥、脊振山、各地

カシラダカ、冬鳥、各地

ミヤマホオジロ、冬鳥、各地

シマアオジ、旅鳥、1924. 3, 24鳥栖

ノジコ、旅鳥、唐津

アオジ、冬鳥、各地

クロジ、冬鳥、馬渡島、唐津、巖木

+ シベリヤジュリン、冬鳥、有明沿岸
(キタシベリヤジュリン)、旅鳥、有明沿岸
筑後川口

オオジュリン、冬鳥、浜、有明干拓、唐津

アトリ科

アトリ、冬鳥、各地

カワラヒワ、留鳥、冬鳥、各地

(オオカワラヒワ)、冬鳥、各地

マヒワ、冬鳥、各地

+ イスカ、旅鳥、S, 43, 10, 26馬渡島

ベニマシコ、冬鳥、北山ダム、多良、大野

ウソ、冬鳥、各地

コイカル、旅鳥、S, 42, 5, 19 } 馬渡島
S, 46, 5, 3 }

イカル、冬鳥、各地

シメ、冬鳥、各地

カエデチヨウ科

ベニスズメ、留鳥、漂鳥、唐津、神埼

ブンチョウ、漂鳥、唐津

ハタオリドリ科

ニュウナイスズメ、冬鳥、川副

スズメ、留鳥、各地

ムクドリ科

コムクドリ、旅鳥、各地

ムクドリ、留漂鳥、各地

カラス科

カケス、留鳥、山地

オナガ、留鳥、S, 36, 10まで絶滅

カササギ、留鳥、山地、唐津以北を除く各地

+ コクマルガラス、旅鳥、S, 36, 12三瀬

ハシボソガラス、留鳥、各地

ハシブトガラス、留鳥、各地

計50科、254種 (S, 48, 1, 12)

第11回研究講座

近世美術史上の中央と地方について

九州芸術工科大学教授 岸田 勉



研究講座風景

近世美術の直接の源流となっている中世あるいはそれ以前の美術活動は、京都、奈良が中心であったが、応仁の乱後、京都が荒廃し、いわゆる中央の水準での美術が地方へ伝播することになり、中央と地方との間の美術交流が見られることになった。

また、禅宗の普及により、例えば博多など、中国への経路となったところでは、画僧が直接に宋、元の画をもたらす事例も数多く、かくして中世末期から近世初期にかけては、絵画史に限れば、京都画壇に対して西日本画壇でも称すべき傾向がもたらされるようになるのである。

具体的に、西日本関係の個々の画家の名をあげてみれば、唐絵作家で最初の御用絵師となり足利将軍に仕えた周文の師如拙は、応永年中西海に来ており、周文を継ぐ備中出身雪舟は、周防山口に庵を設けているし、彼の後の雲谷派からは、肥前出身の雲谷等顔、甬雪等禅があり、薩摩には雪舟と同期に楊月がいたし、祥啓（啓書記）もあるいは九州出身かと扶桑画人伝に出ている。また、「画師的伝宗派図」によれば、雪舟の弟子として秋月（等観）をはじめ、山口、九州関係の画家20数人をあげており、さらにその師承系統も示している。いわゆる雲谷派の系図と呼ぶにふさわしいものである。さらにまた、これ以外にも、他の美術文献から雪舟系の画家を幾人かあげる

ことができる。いわば、これらは、当時の西日本画壇の主流をなした人々であったのである。

このように、近世初期に至る西日本画壇は、とりわけ漢画系の画家に見るように、京都画壇に対し、大きな影響力を持ちえたのであるが、江戸時代も初期を下り、従来の雲谷派にかわって狩野派が全盛時代を迎え、幕府の御用絵師を中心に、再び中央集権的な美術が展開されるようになると、地方の諸藩はもっぱら狩野系統のおかかえ絵師を通して、中央画壇の摂取につとめるほかなくなった。

むしろ、江戸中期以降、地方に在ってすぐれた作品を残したのは、西日本に限れば、田能村竹田らの文人画、あるいは沈南菡系統の写生派の画家たちであった。また、狩野派に対し、市民芸術とも呼ぶべき琳派、浮世絵の画家達が見当らないのも西日本地方の特徴である。

さて、今回展覧されている佐賀県出身の近世画家たちを概観してみると、先ず雲谷派としては広渡雪山が、江戸初期の気道のある画風を示しており、狩野派の画法は、大木英鉄、広渡心海、永松玄徳、白如齋成真らの御用絵師の手がたい筆致の中に窺うことができる。南画家（文人画家）としては、幕末に近く、草場佩川、武富圀南、高柳快堂らがあり、また、岸駒についた岸天岳は写生派系統の画であり、成富椿屋には南菡系の処理が見えるし、長谷川雪塘には、大和絵の素養が十分に感じられる。

このように、本県の画家たちも時代的な背景の中で、それぞれに得意とした画を遺したのであるが、従来、美術史が中央的な作家の羅列に走る嫌いがあったため、これらの地方作家たちの業績が忘れられがちであった。しかし、美術史を正確に把握するためには、地方作家の発見を通して中央とのかかわり合いを追求することが何より重要なことである。その意味からすると、この種の展覧は、日本美術史を充実する上で、今後、しばしば企画されねばならない誠にご貴重意義を持つものであることを信ずるものである。

(昭和48年7月28日当博物館中展示室での講演内容の要約)

(文責 三輪 英夫)

茶室「清恵庵」

紹介

このたび旧佐賀城三の丸址の博物館の南側お堀端に、県民待望の茶室清恵庵が見事に竣工した。その落成式はさる10月10日の秋晴の佳き日に、寄贈者市村幸恵氏をはじめ、池田知事ほか関係者来賓多数の出席の下に行なわれ、記念すべき茶室開きと野点も、裏千家淡交会佐賀県支部の方々のご協力でも厳しく、かつ和やかな雰囲気のもととり運ばれた。

茶室、清恵庵は、郷土出身の実業家として高名な故市村清氏の遺志によるものである。同氏はさる昭和38年に、明日をになって立つ若人のために、佐賀県体育館を寄贈された。体育館の「動」に対して「静」の茶室は、とかく騒音と多忙の中にあけくれる現代人に、静寂閑雅な環境の中に、日本の伝統に心をひそめ、やすらぎをとりもどす施設としてご寄贈いただいたのであって、「清恵庵」の名称は、市村清、幸恵ご夫妻の名から1字ずつとられている。

この茶室は、「利休の茶」、「利休の茶室」などの名著を出しておられる斯界の権威者であり、国の文化財保護専門審議会委員堀口捨己氏の設計構想と指導のもとに、早川設計事務所が設計し、松尾建設株式会社が施工した。

建築面積は69.49平方メートルで、茶室四畳半につき、七畳半は書院造りの「控」の間となっており、水屋や寄付などはいままでもないが、小さい台所や化粧室もあり、かなり多人数のけい古茶や茶会にも利用できるように設計が行き届いている。

また、竹の生垣をめぐらして露地が構成され、特に南面は春夏秋冬の季節の移り変わりの中でさまざまな景観をつくり出すお堀をそのまま「庭」の一部として見立て、水面に舟だまりをこしらえ、建物が水面に映えるようにした構造は訪れる人々の心をとらえてはなきない。

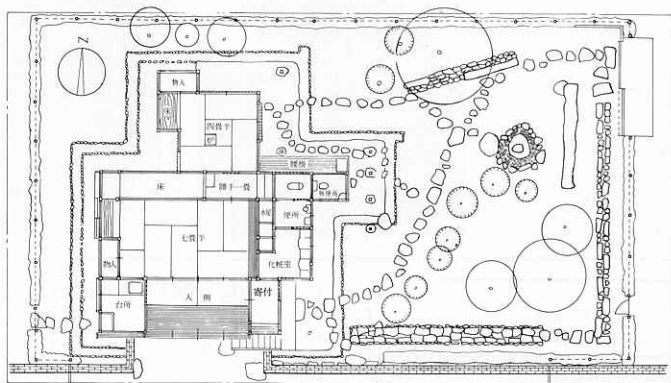
この茶室は、毎日午前9時から午後4時30分まで開室します。ただし、毎週月曜日、国民の祝日の翌日および12月28日から1月4日までは休室します。

使用料は、4時間までは1,500円、4時間を超え8時間までは3,000円のほかに、光熱水費として1時間当たり30円となっています。使用希望日の10日前までに当博物館に申し込み手続きをとってください。



南堀端から見た「清恵庵」

茶室平面図



木造平屋建寄棟造 建築面積69.49㎡ (21坪)

博物館日誌

8月25日	「日展」開場 池田知事、西日本新聞社長 福田利光氏、日本芸術院会員日展常務理事 古賀忠雄氏、同井手宣通氏、山田中吾氏、蓮田脩吾郎氏、金子鶴洋氏ほか多数来館	10月9日	川副町中央公民館で「移動博物館」開催 (10月11日まで)
9月1日	岡山県副知事 荒木栄悦氏来館	10月10日	茶室「清恵庵」寄贈落成式市村幸恵氏、館林三喜男氏、池田知事ほか多数出席。
9月2日	佐世保市立文化科学館長水野賢氏来館	10月12日	日下八光氏夫妻「裝飾古墳壁画展」展示指導のため来館 NHKテレビ、スタジオ102で「裝飾古墳壁画展」放映。
9月9日	長崎県立美術博物館長松尾哲男氏来館	10月13日	「裝飾古墳壁画展」開場式 NHKテレビ「話題の窓」で「裝飾古墳壁画展」放映 第12回博物館研究講座 演題「裝飾古墳壁画のしくみ」 講師 東京芸術大学名誉教授 日下八光氏
9月24日	「日展」終了 (総観覧者数67,145名)	10月20日	神埼町役場で「移動博物館」(10月22日まで)
9月29日	「九州沖縄工芸秀作展」開場 (3号展示室 10月5日まで) 「理科作品 佐賀支部展」開場 (大展示室 10月1日まで) 博物館協議会開催 (応接室)	10月22日	池田知事 中小企業庁長官外山 弘氏、福岡通産局長福田敏南氏を案内して来館
10月3日	「理科作品県展」開場 (大・中展示室 10月6日まで)	10月23日	印度カルカッタ大学教授レッシューバナジー氏はか5名来館

行事お知らせ

修学旅行の計画に博物館の見学を折込んでください。

展覧会名	会 期	観覧料 () は団体料金	内 容
第23回 佐賀県美術展	11月17日～11月25日	大 人 100 (80) 大・高生 80 (50) 小・中生 30 (20)	日本画、洋画、彫塑、工芸、写真、書、宣伝美術の各部門にわたり県内より公募したものの入選作品、委嘱者作品、審査員作品を展示して佐賀県における現代美術を一般に紹介し、地方文化の高揚に資する。
休 館	11月26日～11月27日		佐賀県高等学校美術展準備のため
佐賀県高等学校美術展	11月28日～12月2日	無 料	佐賀県内の高等学校生徒が製作した水彩、油彩の絵画を一般に公開する。
日本近代文学展	12月1日～12月23日	大 人 50 (30) 大・高生 30 (20) 小・中生 20 (10)	全国各地に保管されているわが国の近代文学者 150名の原稿、初刊本、遺品、肖像写真等の資料を中心に展示する。
日本近代文学展 特別講演会	12月8日 13時30分から	講 師	梅光女学院大学長 佐藤泰正氏 題「激石と現代」 作 家 劉 寒吉氏 題「森鷗外と九州」
休 館	12月24日～1月9日		常設展準備のため
常設展 佐賀県の歴史と文化展	1月10日～3月31日	大 人 50 (30) 大・高生 30 (20) 小・中生 20 (10)	佐賀県の地質時代から現代までの自然史資料や考古、歴史、美術工芸の資料を系統的に展示し、本県の歴史と文化の特質について一般の理解に資する。
新道跡出土資料展	1月20日～2月8日	常設展料金を含む	県内の道跡のうち、近年緊急調査、学術調査によって出土した資料を中心に、関係資料を公開、資料をおして当時の人々の生活のあとをかえりみながら、道跡に対する認識と文化財保護思想の普及と向上をはかる。
新道跡出土資料展 講演会	1月26日 14時から	講 師	佐賀県文化財調査監 木下之治氏
鍋島藩窯展	3月5日～3月24日	常設展料金を含む	わが国の陶磁器史上異彩を放った鍋島藩窯でつくられた色鍋島、鍋島染付、鍋島青磁を中心に、発掘陶片を一宮に展示し、藩窯の価値の再認識に資する。
鍋島藩窯展 講演会	3月9日 14時から	講 師	美術評論家 永竹 威氏

◎急 告 12月9日～19日。
セーヌの哀愁の画家
マルケ展 (於大展示室。油絵等約 100点)

◎職員異動 (9月16日付)

○転入 学芸課普及係主事池田栄子 (県立図書館資料課司書より)

博物館報 第 17 号
発行年月日 昭和 48 年 11 月 1 日
編 集 古 賀 秀 男
発 行 佐賀市城内一丁目15～23
佐賀県立博物館
印 刷 佐賀印刷社